

それから

—— 映画文学人生論

原作：夏目漱石 (1909) 「朝日新聞」

監督：森田芳光 (1985)

脚本：筒井ともみ

出演：長井代助

松田優作

撮影：前田米造

平岡三千代

藤谷美和子

音楽：梅林茂

平岡常次郎

小林薫

長井得

小笠原

何故働かないって、そりゃ僕が悪いんじゃない。つまり世の中が悪いんだ。

夏目漱石『それから』は『三四郎』『門』とともに三部作といわれている。三四郎が二十三歳の大学生、代助が三十歳の高等遊民、宗助が三十代の役所勤めの妻帯者という年齢、職業からは同一人物の青年から中年までの生き方を描いた一連の恋愛心理小説のようだ。

ただし、三四郎と代助は同一人物ではない。三四郎の実家は九州の田舎、代助の実家は東京である。失恋した相手も美禰子が結婚したのは三四郎が知らない人物だったのに対して、三千代が結婚したのは代助の親友の平岡だ。

代助は三十歳になっても仕事はしていない。月に一度は必ず、本家へ金を貰いに行く。現代ならニートと呼ばれるような男だが、独立して一戸をかまえ、女中や書生をかかえている。実業家の父や兄との関係で園遊会に招待されることもある。

「何故働かないって、そりゃ僕が悪いんじゃない。つまり世の中が悪いんだ」と代助は平岡にいう。食うための職業は誠実には出来ないと彼は考えている。

ところが、失業した平岡はそんな悠長なことは言っていられない。今すぐ当座の金がいる。妻の三千代を通じて金を貸してくれと代助に依頼してきた。代助は同情し、三百円を都合してやる。

もともと代助は三千代が好きだった。三千代は



それから

映画文学人生論

親友の菅沼の妹であり、代助と三千代は結婚するのが自然の成行だったが、菅沼が死んでから、平岡が三千代との結婚を望み、代助に相談してきたために自然の成行きがおかしくなってしまった。

代助は平岡への友情から身をひき、平岡と三千代との結婚を周旋した。二人の幸福な結婚生活を願っていたが、三年後、平岡は失業し、三千代の結婚生活が幸せなものではないことがあきらかになる。その時点になって、代助は「僕の存在には貴方が必要だ。どうしても必要だ」と告白する。

それに対して、「残酷だわ」と三千代は云ったが、「仕様がな、覚悟を極めませう」と受け入れた。その事実を平岡が代助の父へ手紙で知らせたため、代助は実家から勘当されてしまう。

食うための職業は誠実にできにくいと言っていた男が、食うための職業を探さざるをえなくなつたという喜劇である。

森田芳光監督の映画はメロドラマ風につくられていて、観客は二人が可哀想だと思わされてしまふが、原作からはそれほど可哀想な感じはしない。「僕は一寸職業を探して来る」と言って日盛りの表へ飛び出した代助の頭の中で世の中が真っ赤になるが、三部作だから、やがて『門』の宗助として崖下の家で妻とひっそり暮らすようになることが読者にはわかっていゝためだろうか。

それからそれはそれからのこと懐手